



新庄村に古くから伝わる「新庄田植唄」が、今月2日に同村野土路で行われた田植えで披露された。農業の機械化で手植えが消えるに従って次第に聞かれなくなっていた。実際の田植えの場で歌われるのは半世紀ぶり。村内の民謡グループが、緩やかなテンポの民謡を伸びやかな歌声で山里に響かせた。（根本博行）

# 半世紀ぶり新庄田植唄

## アムダ依頼であぜに立ち

### 民謡・北部明泉会 村長感慨「村の宝後世に」

村教委などによると、新庄や太鼓で手拍子で」と田植えを盛り上げる。「下げ」と呼ばれる太鼓のたたき手と、苗を植える早乙女が掛け合いで歌っていたという。

中西さんによると、復活させた後は「天津井節」（倉敷市）と並んで県を代表する民謡になったが、全国を巡回する国民文化祭や村内、岡山後楽園でのイベントなどで披露されるほかは、実際の田植えで歌う機会はなかった。

同支部の吉村水登里さん（75）は「亡くなった祖父母や、歌で元気を付けて田植えをしていた昔を思い出しながら歌った」と感慨深げ。

披露の様子を見守った笹野寛村長（62）は「小学生の頃、男性が太鼓を持って歌い、女性が苗を植えている姿を見た記憶がよみがえった。村の宝の唄でもあり、後世に残していきたい」と話していた。

歌詞は、「大山がーやーハ イサー 横手の空に」と村を包む風景から入り、「前田を植えるにゃ にぎやかに 笛を依頼し、同支部が快諾。